

# 高山

たかやま  
高山の原生林を守る会

会報 第 80 号

2012年3月



横向（鬼面山西山麓）ブナ林観察会 佐藤 清子

2月12日は、今年初めての観察会です。2月も半ば過ぎというのに朝から吹雪という悪天候の中、「こんな天気でも観察会はあるのだろうか？」と半信半疑で集合場所に行きました。しかし、すでに集まっていた皆さんは余裕の笑顔で迎えてくれ、そんなことを心配していたのは私だけのようでした。ありのままの自然を観察するということでしょうか。

案の状、横向きスキー場に着いた頃には、おだやかな冬景色に変わっていました。最近ではどこのスキー場も人が少ないですが、横向温泉の宿泊客と思われる車が2、3台止まっているだけのこの静けさは別格です。一つ尾根を隔てた箕輪スキー場の賑わいとは対照的でした。

各々、スノーシューや山スキーを履き、守さん先頭にブナ林とサワラの自生地を目指して歩き始めました。スキー場の新雪の上を歩くのも気持ちがいいのですが、そこからちょっと森の中に足を踏み入ると、伐採後の二次林とはいえ静かな森の空気に触れることができ、心が癒されます。オオカメノキの冬芽は可愛らしく両手を挙げて歓迎してくれ、シルバーやゴールドのビーズを束ねたようなヤマウルシの実は雪をまとってずっしりと垂れています。ノリウツギは装飾花のまま薄黄色のドライフラワーとなり、枯れていながらも美しく、わび・さびの世界を感じる冬ならではの味わいです。



ヤマウルシの種子



ウリハダカエデ、クロモジの冬芽などを観察しながら、なだらかな斜面をゆっくり登る頃には、雲の合間からうっすらと青空ものぞき、土湯峠が銀色に光っていて美しく、冬の天気はあてにならないものだということを思い知らされました。

冬の森は一面どこまでも真っ白、すっかり葉っぱを落したモノトーンのブナの木にはヤドリギや熊棚を見ることができました。昨年はブナも豊作だったようでブナの実がいっぱいついたままの木が沢山あるのに、あんなに高い枝までよじ登って、ブナの実をむさぼっている熊の姿を思うと気の弱いクマのプーさんみたいで親しみを感じます。

林の中にカンバのような横縞模様で美しい木肌の細い木を見つけて、「これは若いミズナラの木です」という守さんの説明には驚きました。私の知っているミズナラは、分厚くひびせんべいのような木肌で、どっしりとそびえて存在感のある大きな木です。そして、見慣れたブナの幹にも新たな発見がありました。あの独特な木肌の模様は地衣類といい、白っぽい苔と緑を帯びた藻類がまだらに繁殖しながら共存しているのだそうです。人も木も年を重ねると面の皮が厚くなり、肌にも深いしわやまだらのシミが現われたりして、よりその人らしさがにじみ出てくるように感じられ、ガッテン！

高森川の沢沿いのコースは登るにつれ格好のいいブナの林となります。ここから少し傾斜のある斜面を10分くらい登ると、お目当ての大きなサワラの木がありました。これまでサワラの名前はあまり聞いたことがありませんでしたので、これがサワラの木ですと言われてもヒノキのようにも見え区別が付きませんが、葉っぱの裏側の模様が白い蝶の形が見分けのポイントらしいのですが、ルーペでみても私には見分けられませんでした。どこかの山でサワラに出会っても気づけるかどうか、残念ながら全く自信がありません。魚のサワラならわかりますが・・・、ごめんなさい。

サワラの木を観察した後は、一気に下り風の通り道避けたブナの林の中に、恒例の雪のテーブルをつくり、肩を寄せ合ってお昼をひろげましたが、温度計を見ると気温はマイナス12度です。寒さに震えながらもくもくと食べた後は、あっという間にスキー場に戻りました。



鬼面山西斜面のブナ自然林



ブナ自然林を登る



センシゴケ  
地衣体にみられる穿孔が最大の特徴。



鬼面山西斜面のブナ自然林

厳冬の観察会は、空気が凜として気持ちがいいものです。今日の観察会では、珍しくアニマルトラックをあまり見つけられませんが、自然界では動物も植物も淡々と共存していて、全てが循環しています。人もかつては自然と調和した生活を営んでいた時代があったはず・・・。昨年はこの福島の地で自然界には存在しない放射能が大量にばら撒かれるという大惨事が起きてしまいました。受け入れがたい現実ではありますが、今一度、自然をつぶさに見ることから始めて、循環できる生活様式に戻すことを我々に気づかせるための“神の計らい”と思えてなりません。

あらためて自然観察会の意義を感じさせられました。

2011年の1月に、偶然ノウゼンカズラの果実に出会い、そのユーモラスな外観と、中に詰まっている種子に惹かれたのです。また、そのとき、それとは別なことにも興味がわいていたのです。一つは、手持ちの植物図鑑によると、ノウゼンカズラの果実は日本では結実しにくいという。なのに、どうして、ここのノウゼンカズラは結実したのか。二つ目は、この木が結実したのが、これが初めてなのか、それとも毎年なのか。もし仮に、初めて結実したとして、その原因が昨夏の猛暑にあるとしたら、この木以外にも結実した木があったかもしれないではないか。ならば、それを探してみなくては…などなど、私流の好奇心が首をもたげたのです。でも、冬枯れの時期に他のノウゼンカズラの木がどこにあるかなどわかるはずもなく、花の咲く季節まで待つことにしたのです。

ところが、3月11日の大震災。大地は、原発事故によって放射能に汚染されてしまったのです…。桜が、いつ咲いたのか、いつ終わったのか。心はうつろでした。ある作家は「この春、日本ではみんながいくら悲しんでも緑は萌え桜は咲いた。我々は春を恨みはしなかったけれども、何か大事なものの欠けた空疎な春だった。」と表現していましたが、まさにそのとおりでした。…そんな日々の中で、庭のシュンランに人工受粉を試みることをためらいながらも、昨年一本だけ結実したのが私の人工受粉によるものなのか、確かめなくてはなるまいと、今年も試すことにした。

SさんやAさんにフモトスマレのありかを案内すると約束していたことを思い出し、慌てて下見に出かけたりするうちに、頭の中のモヤモヤが少しとれてきました。そうして、6月末、ふっと、ノウゼンカズラのことを思い出しました。花芽が付いたころかなと思っていたのが、なんと花が咲いているではありませんか。アメリカノウゼンカズラでした。その漏斗状の、濃い橙色の花びらに、蜂がブンブン出たり入ったりしていました(写真①)。よく見ると、蜂の体に黄色い花粉のようなものが付いています。「これはスゴい。結実の秘密はこの蜂かもしれない！」と、興奮しました。ほぼ1か月後、このアメリカノウゼンカズラの木には、青々した果実が下がっていました(写真②)。図鑑には、結実しにくいとあるけれど、「ここに、こんなにいっぱい実を結んでいるよ～」と叫びたい気分でした。

さて次は、この木以外にも結実している木があるかもしれないという疑問が残っています。それを探してみなくてはなりません。この時期、自転車で町内を走ると、どこの家の庭にもノウゼンカズラかアメリカノウゼンカズラの花が咲いていて驚きました。去年もこんなに咲いていたっけ？と思いながら、果実を探しました。結果は、植物図鑑の解説どおりでした。どこのノウゼンカズラも全然果実を付けていませんでした。一個くらい付いていてもよさそうなのに、全く付いていません。やはり、ノウゼンカズラが結実するのは稀なことなのでしょう。

ならば、どうしてあそこの木だけが結実するのか、不思議です。やっぱり結実の秘密はあの蜂にあるということなのでしょう。あの蜂は、あそこにだけやってきて、他のところに飛んで行かないのでしょうか。どうしてなの？なぞはすっかり解けたわけではありません。この後、どう調べればいいのか。(2011.9.16)



写真① ミツバチ



② 果実

宮沢賢治「よだかの星」に寄せて

伊藤順子

もう数十年にもなるけれど、仕事を覚え家業を支えたい一心で我武者羅に脇目もふらず突っ走って居て、自他共に何とか半人前くらいにはなったかな？と一息吐いた頃、ふと立ち止まってしまった。すると何かかもが迷いの要因になってしまって落ち込んだ。

天下の資材を使って私は何をしているんだろうか？本当に自分にその価値があるのか？本当の自分を生かすのはこれで良かったのか？大体、私は生まれてきて良かったのか？堂々巡りの地獄の中で本当に犬が自分の尻尾を咥えるように意味もなく回っていた&悩んでいた。

それでも、そんな馬鹿な私を見捨てなかった人々も居て、自然の中を歩くことから始まって、以前よりもっともっとふてぶてしく日常を歩き始めたけれど、宮沢賢治の「よだかの星」を読むと、彼の痛みが良く解る気がして一緒に悩んだ



りする。

近年、「命を頂いて命を生かす」という言葉に出会い、これは是非、彼のよだかに伝えてやりたいとも思い、自分もそのように日々人も物も大切に暮らしたいものだと思っていた。

けれど、3/11の大地震に続く原発事故は、そんな「頂く命」の全てを無残にも台無しにした…。当初は無我夢中で、悪いということは避け、助け合えることは助け合い、学べることは学び、長引く余震の中で日々を送って来たけれど、これでもか？これでもか？と容赦なく襲いかかる放射性物資の爪跡は「前を向こう！」「めげない！！」と思って上げた頭をにべもなくな垂れさせる。それでも、命ある限り此の目には見えない地獄の中で闘って生きて行くしかないのだろう、一瞬の間に或いは辛い避難生活の末に星になった同胞の無念のためにも。

## 鹿狼山から 20 ～被災地、あれから1年～ 小幡 仁子

今日は3月11日。あれから1年が過ぎました。ここ新地町では大津波により100名を超える方が亡くなり、沿岸部の町並みが消え去りました。本日、町の総合体育館では追悼式が行われました。

私は勤務先の生徒が一人、この津波によって亡くなったので、お墓参りをするために出かけました。早めに家を出て海の方に立ち寄ってみました、国道6号線を東に50mほど下ると、そこは未だに別世界です。「日常の生活」というものが消え去った、なんとも孤独で荒れ果てた世界が広がっています。ガレキは片付けられましたが、あちこちに転がる大きなコンクリートの塊は、津波で破壊された堤防の破片です。倒れたままの電柱は、運ぶには重すぎるのか、運ぶ先がないのか、これも津波の破壊力のすごさを物語っています。多数の家々は基礎コンクリートを残すのみです。

今日是一周忌に当たるので、法要で親族が集まったのでしょう、土台しか残っていない家に入り、指差しながら話している光景がありました。ここが茶の間だった、ここは台所だったなどと確かめているようでした。黒ネクタイの喪服姿でしたから、そこに住んでいた誰かが流されて亡くなったのです。お坊さんの姿もありました。お坊さんと一緒に手を合わせて、何度も何度も頭を下げて祈っている女性もいました。改めて、ここには数え切れない悲しみがあったのだと思いました。

新地町では、この大津波で町域の5分の1が浸水しました。600世帯近くが半壊・全壊の被害を受けました。家を失った方は、町に数カ所ある応急仮設住宅に住んでいます。今回の町議会で、この津波浸水地域は、人が住む住宅や施設は建ててはいけない災害危険地域に指定されました。被災した町民の方も賛同してくれたということです。早い時期に海岸には防潮堤を建設し、災害危険地区は防潮林や防災緑地を配置し、また、道路や鉄道を整備して、二線堤をいう考え方で「減災」していくことになりました。

1000年前にあったという大津波の到達点が、今の国道6号線と一致するといえますから、国道の東側の低い土地は、本当は危険な土地だったと思います。人間は自分たちに都合が良いように埋め立てたり、開発したりしてきました。海抜0m地帯でも、厚いコンクリートの堤防を築き、それで安心して暮らしてきました。しかし、人間は自然の脅威の前には無力であることを思い知らされました。この先も何があるか分かりません。原発の問題を含めて、人間は自然に対してどのように働きかければいいのかを、考え直さなくてはならないでしょう。



倒れた電信柱は今もそのまま



水田に埋もれたガレキの撤去作業  
(作業は被災集落総出で)



津波の土砂の中から蘇った  
ブドウ「あづましずく」

さて、教え子のお墓参りには、同級生達が集まってくれました。職に就き、およそ1年になります。この震災で仕事のスタートが遅れましたが、職場に慣れ、各々が自分の役割を果たして、無事にお給料をいただいているようです。レストランで一緒に食事をしましたが、旺盛な食欲には目をみはりました。若者はエネルギーです。久しぶりに話が弾みました。

教え子のお墓は、海の見える高台にありました。ここまでは津波はこなかったものの、直ぐ下には基礎しか無い家の敷地が見えました。また、ひしゃげた車も残ったままでした。教え子の家はここの直ぐ下にありました。早くに逃げてここまで来ていれば助かったのでしょうか…。

「おーい、来たぞ。いやあ、さみい(寒い)なあ！」と一緒に来た中の誰かが大きな声で言っていました。「おーい、来たぞ」はこの津波で亡くなった友達に語りかけたものと思いますが、その口調の屈託のなさに、私たち大人は顔を見合わせて笑ってしまいました。これからの未来を支える若者は、このように元気なのが一番です。辛いことも悲しいこともあるけれど、日々一生懸命働いて、社会の中で役立つもらいたいと思いました。そして、ここに眠る友達のことを忘れないでいましょう。彼は私たちの心の中で生きるのだから(2012年3月11日)。



### もりびとノート

- ◇ 2011年3月15日、午後から天候がくずれ、雪まじりの降雨となった。この季節になるとよくある天候の変化であるが、その雨は日本に60年以上ぶりに降った3回目の雨。
- ◇ 2007年7月12日発行「植物が語る放射線の表と裏」(鶴飼保雄著)を読む。集団遺伝学に基づいた解析は冷静で好感。今回の事故前に出版された脱原発を主張しない脱原発の書。
- ◇ 「ふくしま」=放射能で汚れた地域のイメージが汚みついた新たな偏見と差別。
- ◇ 想定外の事象;『原発御用学者』は悔恨を懐に被災地を走り、『脱原発運動家』は彼の地で「逃避」を叫ぶ。『公僕』はシェルターに閉じこもって「安全」を宣言する。環境汚染でありながら、「環境」という言葉が使われない「公式」除染指針。
- ◇ 「被災地で生活」する者が欲しいのは過去のレットテルではなく、ともに寄り添う同胞。  
(2012年3月17日)

## 東北ブナ紀行(44)「大震災が教えてくれたもの IV」

### ～花塚山放射能紀行～

奥田 博

2012年1月9日、川俣町と飯館村の境にそびえる花塚山を訪れた。参加者は、佐藤守さん、佐藤哲也さん、小幡仁子さん、佐藤久美子さん、渡邊アヤ子さん、と私の六人。今年から阿武隈山地を中心に、線量調査を会として行うことが決まり、その第一回目である。登山道にはわずかに積雪があった。登山口から歩き始めた頃は $1\mu\text{Sv/h}$ 程度に推移していた。積雪の影響で、線量は幾分弱くなる。マダラの積雪なので、大きな影響はなさそうだ。しかし、スギ林を経てアカマツ林に入ると、いとも簡単に $2\mu\text{Sv/h}$ を超えだした。登山道には、赤くなった松葉と、最近落ちた緑の松葉が見られる。マツは常に落葉し続け、2～3年で葉は入れ替わるという。針葉樹であるがゆえに、2～3年はセシウムを落と



皆で線量計を携えて



し続けることになる。

ここで各自の線量計を紹介しておく。線量計の精度は、重要だ。日本では、ほとんど人の目に触れることのない線量計であるが、原発事故以来、多くの人買い求めた。しかし一部には、信頼のおけない線量計も出回っていると聞く。決して安いものではないが、人々の不安に乗じた商売をされた。

佐藤守さん TCS172 Aloka 高信頼性

佐藤哲也さん DP802 (RADTEK)中国製

小幡仁子さん RDS30 (RADOS) Mirion 社製

佐藤久美子さんインスペクター 理研計器株式会社

渡邊アヤ子さん RDS31 (RADOS) Mirion 社製 TCS172と比較校正済

この中では佐藤哲也さん持参の中国製線量計は1 $\mu$ 以上の場所では誤差はすくないようですが、安定するまで時間(5分以上)を要する。

花塚山は花崗岩の山で、奇岩や大岩も多い。古くは修験道の山でもあったようで、その名残も見られる。大きな台のような花崗岩でひと休みするが、そこが木に覆われずに空が見えていると線量はさほど高くはないのは、前例の通りだ。ところが市町村境に近い大岩に近付くと、3 $\mu$  Sv/hを超える数値を示している。尾根でありさほどアカマツもかかっていない。この場所は、飯館村側の尾根のコル辺りから風が抜けて、この大岩にぶち当たる。だから高いのか？ホットスポットにはなかなか説明の付かない事象が多いように思う。

飯館村境に出ると、木々の間から飯館村の田畑や人家が望まれる。汚染された田園地帯とは思えない平和な風景が広がっている。三角点の山頂から東屋の建つ花塚台までは2.5~1.5 $\mu$  Sv/hで推移していた。東屋からは遠く太平洋が見えるのだが、よく分からない。

花塚台から北に向かって下れば、飯館村との比曾分岐となる。このコルは、花塚山ではもっとも高い数値を示していた。コルは風が集中する場所であるのであろうか、3.5 $\mu$  Sv/hと大きな数字だ。5m北に移ると1 $\mu$  Sv/hほどに下がるから、まさにホットスポットで、同じ雑木林の中で起きている。そのメカニズム解明の難しさを思い知らされた。

北峰の東屋で昼食をとったが、堅岩までは、積雪が5cm程度あって2.4 $\mu$  Sv/h前後で推移していた。標高を下げると、線量は2 $\mu$  Sv/hを切るまで下がるが、アカマツ林やスギ林の縁では2 $\mu$  Sv/hを超えていた。こうして、会としての放射線量計測の山行を終えた。各自持参した線量計の機差が分かったことは大きな収穫であった。ホットスポットのメカニズムは、分からないことが多いことも分かった。これからは積雪期で、数値が下がるので、しばらく計測活動はお休みとなり、春から再開の予定。しばらくは、線量計持参の山歩きは続きそうだ。

震災から1年経った。本当に早い一年だった。年末に南三陸町や石巻を訪れた時に感じたの

は、ガレキは片付いたが、他は何も動いていない、何も変わっていないのだ。放射能汚染の福島に目を転じれば、今度は、従来の避難区分から「解除準備区域」や「居住制限区域」、「長期居住困難区域」といった線量による新たな区分に変更する。区分が変わっても、置かれた地域の線量は、ほとんど変わっていない。単に半減期を静かに待つだけだろうか。

この一年間、「ブナ紀行」は実質お休みしたが、次回から再開したい。



線量計測は1mの高さで



線量の高かった大岩付近



ツバメオモト(*Clintonia udensis* ユリ科ツバメオモト属)

ブナ林から亜高山帯の林床に植生する多年草。6種あるツバメオモト属の中で日本に植生するのは本種のみである。ツバメオモト属はタイガ(北方寒地性針葉樹林)の代表的な林床植物であり、ツバメオモトは北方から南下した遺存植物とされている。吾妻・安達太良山域ではブナ帯まで降りてコロニー状に小群落を形成している。なお、学名はロシアのウダ川地方で生まれたアメリカの政治家クリントンと読み取れて面白い。

葉は根生葉のみで数枚の大型で、倒卵状楕円形の葉が地上茎の周りに束生する。葉の先端は尖る。葉色は花の季節は明るい鮮緑色で光沢があり、葉身には平行脈が走る。ツバメオモトの英名 bear tongue(熊の舌の意)は葉の形状に由来すると思われる。



花は頂生であり、根生葉の中心から伸びた花茎の先端に短い総状花序を形成し、両性花を着生する。花の構造は3数性である。小花の花冠の色は新雪のような白色で、6枚の花被片に分かれる。これは各3枚の外花被と内花被で構成されている。雄しべは6個で花被片と1対になっている。雌しべの花柱は白く、先端は3裂する。花茎は落花後に再伸長する。交配特性は自家和合性であるが、虫媒による他殖により遺伝的多様性を確保している。果実は瑠璃色の液果で美しい。ツバメオモトの英名の別名 bluebead(青い数珠玉の意)は果実を表したものと思われる。

種子からの芽生えは葉が1枚でそのまま数年を過ごしたあと、葉を増やして花を咲かせるための養分を蓄える。このような生活様式はカタクリを思わせる。しかしカタクリのように大群落を形成することはなく、低木層や草本層の少ない薄暗い林床で、ひっそりと生活を営んでいる様は、祖先が生まれた故郷の生活環境を記憶しているようにも思える。そのせいか、ツバメオモトに出会うときはいつも突然のイメージが強い。大型の葉を背景に、白い花を集めたたたずまいは、安易な修飾語を許さない気品を感じさせる。

ツルアリドオン(*Mitchella undulata* アカネ科ツルアリドオン属)

ミズナラ林からブナ林の湿った林床に植生する常緑性多年草。地表面をほふく茎が分岐しながら走り、節から根を伸ばし群落を形成する。

葉は対生。葉形は卵形で先端は尖る。革質で光沢があり、葉縁に波状の鋸歯がある。種小名はこの葉縁に拠ったものと思われる。

花は頂生でほふく茎から分岐し立ち上がった茎の先端に2つの合弁花を咲かせる。花の構造は4数性である。花冠はストローの先を4片に裂いたような形状でその内側には真綿の様な毛が密生する。雄しべは4個である。雌しべの柱頭も4裂する。イワイチョウやヒナザクラと同じ二型花柱性植物であり、短花柱花では裂片から雄しべがのぞき、長花柱花では花冠から花柱が長く突き出た花を咲かせる。

2個の合弁花の基部は合着したガク筒に包まれる。子房はその下にあり、次第に合着して1個の赤い果実となる。この性質はクロミノウグイスカグラと同じである。果実の先端には4片のガク片の痕跡が2つ残る。この果実は花托が肥大したので偽果と呼ばれる。果実は核果(石果)で中には4個の核がある。モモの様に核の中に種子が1個入っている。ツルアリドオンはほふく茎による栄養繁殖で優良個体を効率的に増殖しながら、種子繁殖では二型花柱性による遺伝的多様性と鳥類等の食餌行為による移動性の確保というたかな繁殖戦略により大群落の形成を可能にしているのかもしれない。



名の由来は外観がアカネ科の樹木アリドオン(イチリョウ)に似ていることによるが、ツルアリドオンにはアリドオンの名の由来となった肝心の棘がないのでアリドオンが植生しない東北ではアリドオンランと併せ、謎めいた名を持つ植物として受け止められる。植物の命名にあたってはもう少し工夫してほしいと思う。

ツルアリドオンの花が咲く頃は、ブナの葉が林冠を被い、わずかな点光が林床を照らす。揺らぐ木漏れ日とツルアリドオンの柔らかな花の雰囲気安らぎを誘い、岳人は山登りの終着点を変更したい衝動に駆られる。



### 第121回自然観察会案内：鹿狼山自然林観察会

日時：2012年4月8日（日）7：00～16：30

集合場所：小鳥の森第1駐車場 集合時間：7：00 参加定員：20名

内容 早春の鹿狼山を散策し、スマレやカタクリなどのスプリングエフェメラル、イヌブナ、シデ類、カエデ類などの萌芽の様子を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、ルーペ（萌芽やスマレの観察に、あると便利です！！）

\*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円）

申し込み：4月7日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

### 第122回自然観察会案内：米沢・斜平山（羽山～愛宕山）新緑と春の花巡り観察会

日時：2012年5月13日（日）7：00～15：00

集合場所 福島県果樹研究所

集合時間 7：00 参加定員 20名

内容 昨年に引き続き米沢・斜平山の羽山～愛宕山の新緑と春の花を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

\*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円）

申し込み：5月12日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

### 西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア（詳細は佐藤守まで）

1. 実施日：6月16日（土）6時30分～17時30分（雨天時6月17日に順延）
2. 内容：天狗岩～西吾妻避難小屋湿地帯と西大巓水場周辺の誘導ロープの設置作業を行います。本年はデコ平ゴンドラの運行開始が7月以降ですので天元台から2班に分かれて実施します。
3. 集合場所・時間  
福島県果樹研究所 6時30分  
日程：6：30（果樹研究所）→8：00（天元台スキー場ゴンドラ乗場）→9：00（リフト終点）→11：00（西吾妻避難小屋）→（作業・昼食）14：00→15：50（リフト終点）→16：20（天元台スキー場ゴンドラ乗場）→17：50（果樹研究所）
4. 準備品：登山靴（長靴）、雨具、手袋（作業用）、昼食、水筒、筆記用具、嗜好品、その他（あればハンマー・ペンチ）

協力いただける方は、6月18日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時でお願いします）。

脱原発署名は476名の方から同意をいただきました。会員の皆様のご協力ありがとうございました。

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】 この冬は比較的雪に恵まれました。営業を停止したスキー場を登ってみると、山麓ではカエデなどの広葉樹やアカマツが再生し、2次林の形成が始まっていますが、スキー場の上部では灌木すら見られないところが大半で、標高が高くなるにつれて森の再生も時間がかかることがうかがえました。一方で、飯館村に隣接する花塚山では、人氣が途絶え、動物たちの楽園の様相を呈していました。動物たちの放射性セシウムの食物連鎖を心配しています。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第80号 2012年3月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木